

第3回環境被害に関する国際フォーラム

セッション3 健康被害と地域再生の取り組み—多様な道筋

長い道のりだった

水澤 洋*

新潟水俣病患者

皆さん、こんにちは。私は、新潟水俣病患者の水澤洋でございます。私は、いろいろ偏見と差別を受けてまいりました。そのうちの一部を皆さんにお話したいと思っております。

話を始める前に、私には水俣病の症状として唇の周り、それから舌が悪いので語尾がはっきりしないところがあります。また、言葉が出ないところがありますが、よろしくお願いいたしたいと思います。それでは本題に入ります。

孫娘との会話からよみがえった過去

ある日のことでもございましたけれども、7歳の孫娘が、「じいちゃんの頭、お月様のようにだ」と言いました。それで私が、「毛がないからだろう」「明日、雲に隠れるかもしれないよ」と、いろいろと珍問答を繰り返していたわけでもございます。急に、私が山野を駆け巡っていた子供の頃が非常に懐かしくなってきたんでございます。それにしても、私の体と心に刻まれた新潟水俣病の傷はどうして治らないのだろうか、65年も経っているのに、と切ない思いになりました。

あの世では治療できると思った

高校3年の夏の日でした。下校途中に、「奇病」「たたり病」「なまけ病」の、罵声を背中に受け、暮すことについて、あるいは、鴻毛より軽い命とあしらわれていたこの世が、飽き飽きとしてきたんです。ほいで、あの世にはきっと、安らぎ、夢を懸ける場所があるはずだ。奇病を治せる薬もあるはずだ。これらを探しに出かけよう、という決心しました。母親がポケットに不測の事態が生じた時のためにと行って、私のポケットにいつもお金を入れてくれた。そのお金を握りしめ薬局に私は向かいました。

*1944年新潟県鹿瀬町（現・阿賀町鹿瀬）生れ。1954年には手・足・口唇の痺れ、頭痛症状等出現、1960年症状増悪し昭和電工鹿瀬病院入院している。2012年に特措法の存在を知り、12月に申請、現在「被害者手帳」を所持している。

それで薬局に入って、睡眠剤50錠を購入いたしました。購入してから、当然、自宅に帰りまして誰にも気づかれないように、周囲を確認してから、3畳の物置部屋に入って。心ときめいた小学校時代の先生。泥の水の中で清らかに咲いている蓮の花のように、凜とした心で生きよう、と呼びかけてくれた女生徒。「奇病」と言う人こそ、心は奇病になっている、と励ましてくれた男子生徒。愛の絆をしっかりと結んでくれた家族に遺書をしたため、1錠も残さず、一気に私は飲み込みました。

2日後に、深い眠りから目が覚めますと、母は疲れ切った顔をして「よく帰ってきてくれた」と言って一筋の涙を流しました。父と兄は無言のまま立っていました。幼い弟は泣きじゃくっていました。それから、主治医は安堵した表情で、「4年前、『失望という病は無いよ』と言ったことを思い出してほしいんだ。あなたの頭痛、しびれの原因も、熊本と同じように間もなく分かるだろう。もうすぐ、足元まできているよ」と言って、病室から出て行く主治医の後ろ姿に、母親は手を合わせて感謝したところでもございました。

私は完全にまだ目覚めていなかったんです。目が覚めていなかったんですが、家族全員の顔が、見えてきました。弱々しい声で、「ごめんなさい。許してください」と言ったら、父が「仏様にお前は諭され、素直に帰って来た。だから、褒めてやるよ、あとは何も言うな」と言ってくれました。2人の兄は、手をしっかりと握ってくれました。泣きじゃくっていた弟は、にっこり笑いました。こんな家族の姿を見て、中学生時代、激しい頭痛、しびれに耐え切れず、こうして机に伏すと「なまけ病患者は出ていけ」と罵倒され、グラウンドの片隅で涙ぐんだ日がありました。幼友達から、「奇病が移るから近づかないで」と言われた、悲しい日がありました。中学の卒業式に、校長先生から「なまけ病を治し、真面目な人間になれ」と言われ、悔し涙を流した日など、つらい悲しい過去を封印して、「生まれ変わらなければならぬ。何のために帰ってきたのだろう。しっかりとしろ」と自分に、鞭を打ったところでもございます。

しかし、その後、婚約者もいましたが、突然破談になるなど、茨の道を裸足で歩くよりも、険しい岩山に爪を立てて登るよりも、また砂を噛むよりもつらい水俣病の運命に、私は心折れそうになると、自分の影となぐさめ合いながら、ひたすら今日まで歩いてまいりました。

「奇病」「たたり病」から解放

2012（平成24）年6月、初めて水俣病の特措法を知りました。家族から、申請期限が迫っているから、早急に、被害者申請をするように促されましたが、過去を封印した私が頑なに拒み続けたところでもございます。しかし、7月のある晩に不思議なことが起こりました。もうすでに亡くなった父、母が枕元に立って、「申請し、真実を語らなければ、塗炭の苦しみに耐えている人達から、後々、罪人〈つみびと〉と言われるよ」と言いました。「そんな姿になったお前を私たちは迎えるわけにはいかない」と諫められ、ようやく申請する決心がついたところでもございます。

同年の12月28日、特措法が適用され、新潟水俣病の病名が付いて「奇病」、「たたり病」から解放された日々になりました。

1955（昭和30）年、「頭の中が蜂に刺されたように痛い。手、足、唇が毒グモに咬まれたようにしびれる。耳の中でセミが鳴いている。心臓が口から飛び出すように動いている」と訴え、母親の傍らにぐったり横になった日から58年経っていました。長い道のりでした。また、かさむ医療費のために、父と母、幼かった兄弟に、糊口を凌ぐ暮らしをさせた日も遠い日になりました。現在は医学発展、良医育成を願い、検体登録も済ませ、「のどかに空に浮かぶ雲、野に遊ぶ鶴」のようにのんびり暮らしております。

昭和電工の未必の故意は忘れることはできない

最後になりますが、奇しくも新潟水俣病は私に教えてくれました。心にある辞書から、「偏見」と「差別」「恨み」の文字を削除すれば、「愛」と「平等」の文字が光り輝き、人間の主体の社会が生まれることを教えてくれました。しかしながら、私は、新潟水俣病の悲劇は、昭和電工の未必の故意によって生じたものであることは決して忘れることはできません。今はのどかに暮らしていると申しましたが、その裏にはですね、齋藤先生の支えがあるから、私はのんびり暮らしていることも出来るのだと、齋藤先生には大変感謝しているところでございます。

差別と偏見そのものは、人間の命まで奪う危険性があるわけですから、一生懸命に研さんをして、差別のない世の中にしていきたいと思っております。

以上でございます。ありがとうございました。